

令和元年5月18日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03251

研究課題名(和文)毛沢東伝に関する総合的考察

研究課題名(英文)A study on the biographical information of Mao Zedong

研究代表者

石川 禎浩 (ISHIKAWA, Yoshihiro)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：10222978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：広範に毛沢東に関する歴史的伝記資料を渉猟し、分析を加えた。とりわけ注意は払って調査、収集したのは、エドガー・スノーの『中国の赤い星』の取材、刊行以前の毛沢東に関する報道や記事である。それらをソ連、日本、アメリカそれぞれの国における対中情報収集体制におきなおして考察することにより、これまで全く知られていなかった毛沢東に伝記資料、肖像資料が存在することを発見した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

毛の初期イメージの形成、展開の過程をあきらかにすることは、わたしたちの知っているさまざまな情報や知識やイメージが毛にせよ、ほかの歴史人物にせよ、また正しいにせよ、ゆがんでいるにせよ、さらには間違っているにせよ、歴史的に形成されたものであることを再認識することにつながるだろう。歴史的に形成されたとは、過去のある段階において、その時代特有の認識(誤認)にもとづく加工や整理、さらには改変・改竄を経て形作られるという意味である。

研究成果の概要(英文)：By gathering various biographical information of Mao Zedong, we discovered some unknown images of Mao. The most important discovery is the early portrait of him which was first appeared in the journal of American left wing in 1933. Another unknown photo of Mao which was published in the official bulletin of Japanese government in 1937 is very important as well, because the purported portrait of fatty Mao was completely different from what we know. By analyzing various versions of early Mao images, we could shed a new light on the formation of the images of the "red sun" or "red star".

研究分野：中国近現代史

キーワード：毛沢東 中国近現代史 中国共産党 伝記

1. 研究開始当初の背景

毛沢東伝は、内外を合わせ、数え切れないほど書かれてきた。とりわけ 1949 年の中華人民共和国成立後に書かれた伝記は、毛沢東の偉大な革命指導者としてのイメージ生成に巨大な貢献をなしたといつてよい。この研究テーマに着目するにいたった理由は、その死後において、毛沢東は厳しい歴史評価にさらされる一方、かれのこれまで研究代表者が従事してきた中国共産党史、および共産主義政党にかんする政治文化の研究によって、中国共産党史や中国現代史を真の意味で学術的研究にし、それらの領域の研究を長らくしばってきた革命史観の枠組みを解体するには、その枠組みを作った本人である毛沢東その人とかれの残した政治文化についての分析が不可避であると実感したことである。なぜなら、毛沢東は革命に従事する政治家であると同時に、革命を如何に描き、歴史的評価を如何に下すかという作業を、自ら行った人物であったからである。

2. 研究の目的

毛沢東伝の材料となる資料を最も豊富に所蔵しているのは、中国共産党(具体的には党所轄の研究室や文書館)であるが、党の文書館(中央档案馆)を対外的に全く閉ざしているように、党史についての情報公開に決して積極的ではない。それゆえ、本研究においては、他の領域に比べ、編纂や発行に制限が多く、それゆえに資料的な整備の遅れている中国共産党史関連の資料の収集を行うことが、第一の目的となる。そのさい、例えば、毛沢東イメージの生成史において、従来ほとんど顧みられることのなかったコミンテルン関連の文書やソ連・欧米で刊行された中国革命関連書籍が、毛沢東をふくむ中国革命運動をいかに描いたのかを分析すること、そしてそのために、いわゆる中共党史資料集以外の一般的総合雑誌などの資料を収集・活用することが求められるであろう。

また、現在に至る毛沢東イメージの創出に決定的影響を及ぼしたエドガー・スノウの 1930 年代の在華取材活動(その成果が『中国の赤い星 (*Red Star over China*)』1937)が、如何なる条件・環境のもとでなされたのかを探ることも、毛沢東原像とイメージ操作の過程を知る上で、非常に重要である。いわゆる中国共産党や党指導者にかんする第一次資料は、往々にしてアクセス不可能なものと考えられがちだが、原資料においても、アクセスの仕方と努力によって、新事実を発掘することはまだまだ可能である。

3. 研究の方法

毛沢東に関する情報や出版物は、玉石混交のまま数多出されてきたが、毛沢東原像を復元するためには、それら資料を取捨選択的に収集・検討せねばならない。ただし、公的評価から自由でない中国の資料の性質に鑑み、中共党史に深い造詣を持つ研究代表者、分担者が各々の専門知識を生かしながら、連携して資料の再収集、再編纂をする基礎作業がまず必要になる。また、中国国外の毛沢東資料の収集や洗い直しをすることも必須である。本研究では、その基礎作業を行った上で、さらに研究分担者以外の専門研究者も加えた共同研究会「毛沢東に関する人文学的研究」を隔週で定期開催し、人文学的知見から意見の交換、すり合わせ、討議を重ね、毛沢東にかんする従来の像や伝の全容解明を目指した。一言でいえば、申請者の構想する毛沢東伝に関する総合的考察とは、現代に至るまで我々の認識をしばっている中国共産党や毛沢東をめぐる叙述が如何に形作られたのかを、人文学的アプローチによって解明するわけである。この人文学的アプローチにおいては、単なる政治家・革命家としては捉えきれない毛沢東の諸相(かれには歴史家、社会調査家、スポーツ愛好家としての側面もある)を、かれの幼少期(清末)から壮老年期(人民共和国期)にかけて、長期的・多面的に跡追う必要がある。それはおのずから、政治史・社会史・文化史などさまざまな分野から毛沢東の生涯をたどることを要請するであろう。基礎的作業としての史料の収集は当然として、膨大な量に上る毛沢東伝各種版本の精査も必要となる。特に、近年中国においては、毛沢東関連の資料の部分的公開が毛の生誕 120 周年(2013 年)をはさんで進んでおり、その動向を正確に把握することは、広く中国近現代史研究を行う上でも重要な課題である。

4. 研究成果

この研究活動に参加してもらった研究分担者にも本研究プロジェクトへの強い帰属意識を持ってもらうため、研究例会はあえて平日昼間の開催とし、隔週 1 回、3 時間の開催という独自ルールを定め、濃密でインテンシブな研究環境を構築するよう努めた。その結果、本研究事業の期間(4 年)に、合計 61 回の例会を開催し、濃密で実際的な報告と討議とを繰り返すことができた。

研究初年度と二年度目にあたる 2015-2016 年度においては、基本的な資料収集とその整理に力点をおく一方、2015 年 4 月に、本研究事業の関係者を中心として発足した共同研究班「毛沢東に関する人文学的研究」を定期開催していくことにより、それぞれの研究構成員の研究成果を持ち寄り、相互の知見を交換した。初回の会合で研究グループのメンバーに研究の趣旨と

ディシプリンを周知徹底し、各々の分担する研究領域を確認した。研究の初年度にあたることに鑑み、研究資料と研究機器・データの収集と構築に力を入れた。5月から夏にかけては、石川、村上の両名が東京、イギリス、台湾で現地調査、資料調査を通じて、多くの関連資料を得られた。その一方で、研究代表の石川は2015年7月にイギリスの中国学研究協会の招請を受けて、ブリストル大学で開催の「Global China: The China Postgraduate Network Annual Conference」で基調講演を行い、毛沢東の初期イメージや伝記的情報の具体的状況を報告し、大きな反響と好評を得た。

2017年度は、毛沢東伝研究についての共同研究グループの研究会を継続実施し、2015年以来収集してきた毛沢東伝に関するデータ、資料、様々な版本などを持ち寄って分析するとともに、毛沢東の国外における影響をとりあげるなど、日本の研究者にしかできないアプローチで実態解明を進めた。研究の中間段階の公開とデータの収集、および学術交流を主目的として9月に本研究グループの主要メンバー7名が北京をおとずれ、毛沢東研究の本山とも言える中国共産党中央組織の党史関連部門とのコンタクトをはかった。結果として、先方の面会不履行により交流は実を結ばなかったが、党史関連の収集という目標は達成することができた。このほか、京大人文研の所蔵する旧鱒澤彰夫氏所蔵の文化大革命期紅衛兵資料の整理を継続した。

最終年度にあたる2018年度は、毛沢東伝研究についての共同研究グループの研究会を引き続き定期開催した。同研究会では、毛沢東伝に関するデータ、資料、様々な版本などを持ち寄って分析するとともに、毛沢東の国外における影響をとりあげるなど、日本の研究者にしかできないアプローチで実態解明を進めた。

研究の対外発信の一環として、8月末に本研究グループの研究代表者がベルリンでの国際学会“New Perspectives on Modern Chinese History in the Light of China's Rise”に参加し、また3月末には研究代表者、および研究分担者3名が武漢の華中師範大学を訪れ、研究成果を披露した。このほか、湖南省にある毛沢東、劉少奇、彭徳懐、曾國藩らの史跡を調査し、それら革命人物の関連施設が今日どのように保存・公開されているかについて、現地調査することができた。また、9月にも石川がアメリカで資料調査を進めた。そのうち、いくつかの研究成果は中国の学術刊行物に相次いで掲載されるにいたっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

石川禎浩、『中国の赤い星』再読、石川禎浩編『現代中国文化の深層構造』京都大学人文科学研究所、査読有、2015、1-59

Ei MURAKAMI, The End of the Coolie Trade in Southern China: Focus on the Treaty Port of Amoy, Suzuki Hideaki ed., *Abolitions as a global Experience*, Singapore: NUS Press, 査読無、2015、130-148

丸田孝志、新世紀以来日本關於抗戰時期中国共産党研究總述、中共党史研究、9号、2015-10-14

Mariko Takegami, The Origins of Modern Geology in China: The Work of D. J. Macgowan and R. Pumpelly, *ZINBUN*, 査読有、46号、2016、179-197

田中仁、21世紀日本学界有關日中戦争史研究、史学月刊、査読有、9号、2015-5-10

丸田孝志、龍神と毛沢東像 戦争・大衆動員・民間信仰、水羽信男編『アジアから考える 日本人が「アジアの世紀」を生きるために』、査読ナシ、2017、192-211

小野寺史郎、欧州戦争と科学振興のジレンマ 中国における第一次世界大戦報道とその思想的影響、東洋史研究、4号、査読有、2017、109-131

村上衛、「大分岐」を越えて K.ポメラントフの議論をめぐって、歴史学研究、949号、査読有、2016、49-54

石川禎浩、『紅星照耀中国』各国版本考略、中共党史研究、5-6号、査読有、2016、102-111、105-117

石川禎浩、中国共産党編纂党史資料的進程(1929-1955)、中共党史研究、7号、査読有、2017、120-126

〔学会発表〕(計10件)

ISHIKAWA Yoshihiro, The Early Global Reception of Images of Mao Zedong Global China: The China Postgraduate Network Annual Conference, 2015年7月、イギリス・ブリストル大学

Ei MURAKAMI, Maritime History of Modern China, Global History Collaborative Workshop: Scale Questions in Global History, 2015年11月、フランス・パリ

森川裕貴、政論家章士釗と日、英知識分子の思想連鎖、東亜人文学的可能性：中日現代思想史之回顧と前瞻、2015年7月、広東、中山大学

ISHIKAWA Yoshihiro, Mao: Unknown Images before the RED STAR OVER CHINA, International Workshop on "Beyond the Sinosphere. Modalities of Interwar Globalisation: Internationalism and Indigenization among East Asian Marxists, Christians, and Buddhists, 2016年7月、ドイツ、ハノーヴァー

Ei MURAKAMI, Global History and Economic History of China, Global History in Chile and Japan (招待講演) Pontificia Universidad de Chile, 2016年11月、チリ、サンティアゴ

田中仁、21世紀的東亜與歴史問題、第10回国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」、2016年8月、中国、済南

石川禎浩、《關於党的布爾什維克化的十二条》(1942年) 一場有毛沢東特色的演説、「毛沢東著作版本及其經典化問題」国際學術工作坊會議、2017年12月、中国、上海

石川禎浩、中共“一大”研究と回憶録、中国共産党與中国夢學術研討会、2017年9月、中国、上海

瀬戸宏、商務印書館版《吟辺燕語》の文化意義 - 再論林的莎士比亚觀、“商務印書館与中国現代文化的興起”国際學術研討会、2017年8月、中国、北京

丸田孝志、毛沢東伝、故事の形成と展開：從中日戦争時期到建国初期、近代東亜知識人の国家構想學術検討会、2017年11月、中国、北京

〔図書〕(計10件)

- 石川禎浩、北京大学出版社、中国近代歴史的表と里、2015、401
村上衛、社会科学文献出版社、海洋史上的近代中国 福建人の活動と英国、清朝の因応、2016、688
高嶋航、青弓社、軍隊とスポーツの近代、2015、440
瀬戸宏、松本工房、中国のシェイクスピア、2016、320
石川禎浩、臨川書店、赤い星は如何にして昇ったか、2016、270
森川裕貴、社会科学文献出版社、政論家の矜持——章士釗、張東蓀政治思想研究、2017、262
武上真理子、社会科学文献出版社、孫中山と“科学的時代”、2017、300
小野寺史郎、中央公論新社、中国ナショナリズム、2017、262
村上衛、森川裕貴、石川禎浩、研文出版、中国近代の巨人とその著作 曾国藩、蒋介石、毛沢東、2019、147
村上衛、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、近現代中国における社会経済制度の再編、2016、477

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
現代中国研究センター 研究グループ1
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/group1.htm>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：高嶋 航
ローマ字氏名：TAKASHIMA Kou
所属研究機関名：京都大学
部局名：大学院文学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：10303900

(2)研究協力者

研究分担者氏名：小野寺 史郎
ローマ字氏名：ONODERA Shirou
所属研究機関名：埼玉大学
部局名：人文社会科学研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：40511689

(3)研究協力者

研究分担者氏名：村上 衛
ローマ字氏名：MURAKAMI Ei
所属研究機関名：京都大学
部局名：人文科学研究所
職名：准教授
研究者番号（8桁）：50346053

(4)研究協力者

研究分担者氏名：森川 裕貴
ローマ字氏名：MORIKAWA Hiroki
所属研究機関名：関西学院大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：50727120

(5)研究協力者

研究分担者氏名：田中 仁
ローマ字氏名：TANAKA Hitoshi
所属研究機関名：大阪大学
部局名：大学院法学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：60171790

(6)研究協力者

研究分担者氏名：丸田 孝志
ローマ字氏名：MARUTA Takashi
所属研究機関名：広島大学
部局名：総合科学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：70299288

(7)研究協力者

研究分担者氏名：江田 憲治
ローマ字氏名：EDA Kenji
所属研究機関名：京都大学
部局名：大学院人間・環境学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：80176768

(8)研究協力者（平成29年度まで）

研究分担者氏名：瀬戸 宏
ローマ字氏名：SETO Hiroshi
所属研究機関名：摂南大学
部局名：外国語学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：80187864

(9)研究協力者（平成28年度まで）

研究分担者氏名：武上 真理子
ローマ字氏名：TAKEGAMI Mariko
所属研究機関名：京都大学
部局名：人文科学研究所
職名：客員准教授
研究者番号（8桁）：70636795

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。